



栗東歴史民俗博物館には明治時代初期の農家住宅旧中島家住宅（国登録有形文化財／旧所在地 栗東市霊仙寺）が移築されています。昭和60年度に解体されるまで住まいとして使われていたこの住宅は平成5年度、創建当初の姿に復元して移築されました。このとき、中島家関係者の証言のもと、土製かまど、ヘツツイも復元されました。復元は地元の古老、三浦平三郎さん（大正3年生）があたりました。土製かまどは家の住人の自家製であることが多く、左官業などプロではない三浦さんも経験者だったのです。

それから20年以上が経過し、ヘツツイは傷みが進んで再築造が必至となりました。しかし、土製かまど作りの知識と経験を持つ人はすでに栗東市内にはありませんでした。そこで“市民とともに”行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会”では、現在の旧中島家住宅の利用者である市民を“家の住人”と考え、市民の手でヘツツイを再生させようと考えました。

平成27年度、いよいよ初代のヘツツイを解体し新しいヘツツイを再築造するときがきました。全く経験のない市民（かまど再生サポーター）や実行委員会が土製かまど作りのプロ、宮奥淳司さん（宮奥左官工業 一級左官技能士）の指導を仰ぎながら、全6回のワークショップを経て、ついに新しいヘツツイを再生させました。

このパンフレットには、旧中島家住宅のヘツツイが市民の手によって再生されるまでのものがたりを記録しています。

ヘツツイ 再生 ものがたり

旧中島家住宅
ヘツツイ（かまど）再生事業

旧中島家住宅のヘツツイと滋賀県のかまど

滋賀県では、かまどのことをクド、オクドサン、ヘツツイ、ヘツツイサン、フド、フドサンなどとよぶ。県北部ではフドとよぶ地域が多く、県南部ではクド、オクドサンとよぶ地域が多い。栗東市域ではクド、オクドサン、ついでヘツツイ、ヘツツイサンの呼称を用いている。なお、語頭に「ド」をつけて、ドヘツツイという特に旧中島家住宅にあるような土製のかまどを指す。

呼称にさまざまなバリエーションがあるように、滋賀県内のかまどの姿も多種多様である。県北部、特に湖北地域では調理場所としてかまどのほかにイロリが室内に設けられ、旧木之本町、旧西浅井町の事例のようにイロリと一体化したような形のかまども見られる。県南部と比べて寒冷な北部では、イロリやかまどは調理用具であると同時に暖房用具としての役割も担っていた。

気候が穏やかになるに従い、かまどの様相、設置場所が変わる。湖東、湖西地域ではかまどは室内にこそないが、ダイドコロへ上るカマチに接して設置される。ぴたりとカマチに接して置かれたかまどの焚口がダイドコロ側に向かって設置されて、調理を担当した人物と寒さとの戦いを感じさせる。ほかに、湖東地域では、近江八幡市域でみられ

るように、大釜と日常的に使用するかまどが分離して設置されている。この場合、大釜は普段使用せず、餅搗きや祭礼のみに用いるなど、一種の神性を持つ場として認識されている。このことは、栗東市域で大釜を農耕用牛の餌を炊くかまどとして用いていたことと対照的だ。

さて、栗東市域を含む湖南地域の特徴というと、特に2つの点が挙げられる。1つは、大釜から茶釜まで一体になった構造、もう1つは土間に独立して設置されていることだ。湖北、湖東、湖西で寒さを避けるように設置されていたかまどは、湖南地域では室内から離れて土間に置かれる。また、湖南地域のかまどすべてに共通するわけではないが、草津市や守山市の事例にみられるような勾玉型まがたまがたとよばれる湾曲した形状をするものもみられる。この地域のかまどは口数が多い傾向にあり、多くの口を一箇所に座って管理するのにより形状となっているのだ。

旧中島家住宅の土製かまど、ヘツツイはというと、大釜から茶釜まで5つの掛け口が連なる勾玉型をしており、土間に独立して設置されている。まさに、湖南地域の特徴を兼ね備えてたヘツツイなのだ。

旧中島家住宅のヘツツイを護る 火廻要慎

旧中島家住宅のヘツツイ脇には火伏せの神とされる、京都あたら愛宕神社の「火廻要慎」の御札が貼られている。この御札、栗東市内では台所のコンロ脇に貼られている家も多い。というのも京都に隣接する滋賀県では南部を中心に愛宕神社への信仰からあたらごう愛宕講がある地域が多く、栗東市内でも10組以上の愛宕講が、毎年代参を送り御札を受けてきている。とはいえ、いまの旧中島家住宅はいずれの講にも属していないため、スタッフが時折用心のため愛宕さんへ上がって御札を受けてきている。



滋賀県内の特徴あるかまど

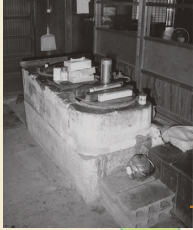
奈良国立文化財研究所編『滋賀県の近世民家』(滋賀県教育委員会 1998年)より作図。()内に記した数字は報告書にある調査番号。写真提供: 滋賀県教育委員会



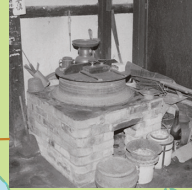
旧西浅井町 TH家(24402)
イロリと2基の土製かまどの一体型



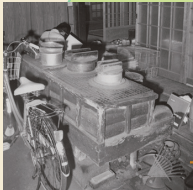
旧木之本町 MK家(24201)
イロリとレンガ製かまどの一体型



旧新旭町 AS家(25002)
土製三口かまど カマチ接着型



旧安土町 KS家(21906)
左/レンガ製一口かまど(大釜) 右/タイル製三口かまど
大釜分離型



旧高島町 KY家(24902)
土製三口かまど カマチ接着型



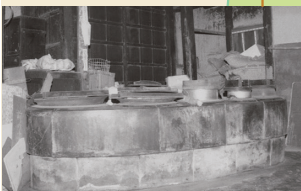
旧秦荘町 KF家(22802)
レンガ製三口かまど カマチ接着型



大津市 NT家(20110)
レンガ製四口かまど
土間独立型



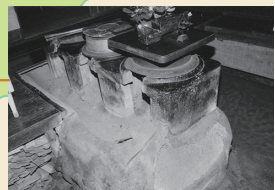
旧秦荘町 金剛苑(22803)
土製三口かまど カマチ接着型



草津市 NT家(20602)
土製五口かまど 土間独立型 勾玉型

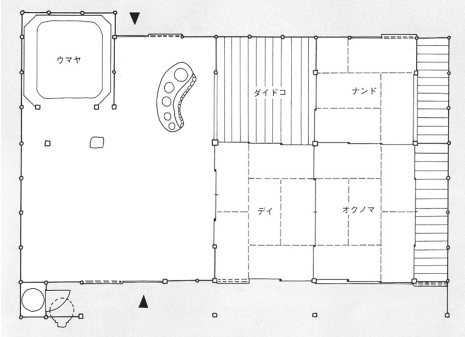


守山市 SS家(20704)
レンガ製五口かまど 土間独立型 勾玉型



旧甲南町 SN家(21703)
土製三口かまど カマチ内部踏込型

旧中島家住宅とそのヘッツイ



旧中島家住宅平面図

旧中島家住宅

明治時代初期、栗東市霊仙寺に建てられた中規模農家の住宅。

部屋を田の字型に配置した、整形四つ間取り型。

昭和60年度に解体、平成5年度に現在地へ移築。このとき改修を受けていた部分はヘッツイを含め、創建時の状態へ復元された。

旧中島家住宅のヘッツイの特徴

- 特徴1** 藁スサを混ぜ込んだ土でできている。
- 特徴2** 鍋釜を置く掛け口が5つある。
- 特徴3** 大釜用の掛け口を含め、5つの掛け口が一体となっている(内部の火袋はそれぞれ独立している)。
- 特徴4** 土間に独立して作られている。
- 特徴5** 煙突がない。
- 特徴6** 勾玉型とよばれる湾曲した形をしている。



ヘッツイの煙の行方

旧中島家住宅の天井は竹と藁で組んだ“ミザラ天井”。ミザラ天井と屋根の間は“ツシ”とよばれる屋根裏。煙突がないヘッツイから出る煙はミザラ天井の隙間をすり抜けツシへと上がり、やがて葎葎きの屋根や屋根の左右に設けられた煙出しを通して外へ出て行く。

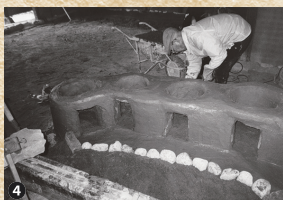
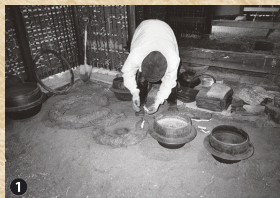
旧中島家住宅には必要不可欠な煙

ヘッツイから出る煙には、天井や屋根に付く害虫を防ぐ役割と、防水の効果があるとされている。実際、旧中島家ではヘッツイに火を入れる日数が減ると、確認される害虫の数が増える傾向にある。



- ①ヘッツイ上部のミザラ天井
- ②屋根の煙出し ③デイ上部のミザラ天井

01 三浦平三郎さんによる 初代ヘツイの土の積み上げ方

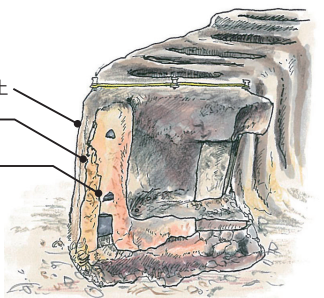


はじめに用いる予定の鍋釜を土間に置き位置決めする。決めた場所で藁スサ入りの土を約10cmの高さで馬蹄形に成型していく①。数段土を積み上げて高さを出す。予定の高さの半分くらいまで積み上げたら、作業を止めて乾燥させる②。数日乾燥させ、同じ要領でさらに半分を積み上げる。土を積み上げる際には、下段と上段の土の間には接着と補強を兼ねて割瓦を入れる。割瓦を接着と補強に用いることは市域で採られた方法のひとつで、この地域の人々の経験や、民俗的知識から編み出された技といえよう。目標の高さまで積み上げたところで、平瓦を半分に切ったものを鳥居型にし、焚口を成型する。瓦は土で塗り込める③。数日乾燥させ、目の細かい土で上塗りしたら完成となる④。

02 解体時の断面調査で現れた 三浦さんによる作業の痕跡

解体途中の断面

表面仕上げの土
上塗りの土
中塗りの土
内側は焼けて
素焼き状態に
なっている



断面は三浦さんが最初に馬蹄形に積み上げた中塗りの土、馬蹄形の中塗り土を塗りこめた上塗りの土、仕上げ塗りの土の3層の土が確認された。ただし中塗りの土は火を受けて赤く素焼きのようになった部分と土のままの部分に分かれていて、積み上げ作業の写真で確認できる藁スサが、素焼き状の部分では高温による影響で変質したのかほとんど見られなくなっていた。

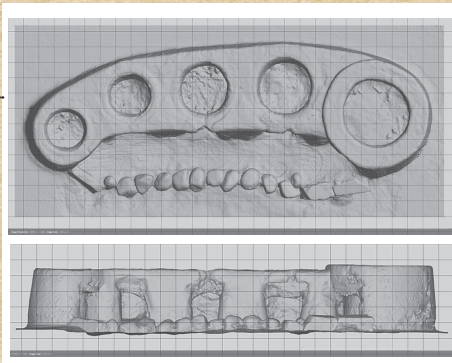
また中塗り土の中には三浦さんが接着、補強用に入れた瓦片が層状になって多数出てきた。断面からは6層に積み上げられた土と、層と層の間に入れられた瓦片が確認できた。

03 三次元計測による 初代ヘツイの記録作成

再生事業によって失われる初代ヘツイの形状は、三次元計測によって詳細な記録を作成し、データで保存した。また大手前大学史学研究所が別途計測した旧中島家住宅の建物データと合わせ、建物内部におけるヘツイの正確な位置も記録した。

この建物データは2代目ヘツイの形状や位置決めのシミュレーションにも活用した。

三次元計測・作図 岡本篤志 (大手前大学史学研究所)



旧中島家住宅ヘツツイ(かまど)再生の工程

日程	作業内容
4月15日(水) 4月16日(木)	土づくり 土発酵用ボール“フネ”組立。市内下戸山の土と古畳から作った藁スサ、砂、水を入れる。以後、週1回寝ねて発酵させる。
4月19日(日)	説明会 かまど再生サポーターを対象に事業内容、作業内容を説明。
5月23日(土) 5月24日(日)	ヘツツイ解体・土づくり 初代ヘツツイを解体、再利用可能な土を取り分ける。
6月 6日(土)	土づくり フネから仕上げ用土を分離。藁スサ、再利用土をフネに入れて捏ねる。2代目ヘツツイの位置決めを行なう。

日程	作業内容
6月10日(水)	土追加 初代かまどからの再利用土が予想以下だったため土を下戸山から追加。以後、フネの水を抜いて土の固さを調整。
7月 4日(土) 7月 5日(日)	土積み上げ 発酵した土を泥団子状にして積み上げる。以後、風を通して乾燥させる。
8月 8日(土)	表面仕上げ 仕上げ用土を金鍬で表面に塗る。以後、風を通して乾燥させる。
8月11日(火)	灰出し調整 焚口前に石を並べ、灰出し部分を区切る。

◎色付き箇所はかまど再生サポーターによるワークショップで作業を行った。
それ以外の工程は実行委員会が行なった。

◎ かまど解体 (5月23日・24日)

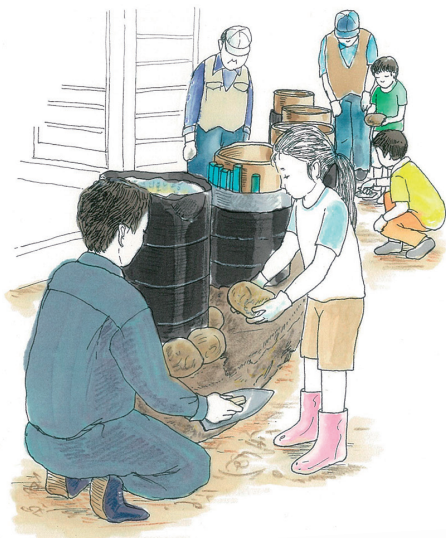
ハンマーなどを使い、ヘツツイを解体(図上)。利用可能な土は篩(ふるい)にかけ藁など不純物を取り除いた上で細かくする(図下)。



◎ 土づくり (6月6日)

細かくした土、古畳から取り出し約5cmに切った藁スサをフネに入れ捏ねる(図上)。発酵が進むと藁スサは繊維状になる。この日、フネから仕上げ用の土を分離。一旦は漉して藁スサを取り除き(図下)、約2cmの藁スサを混ぜた。



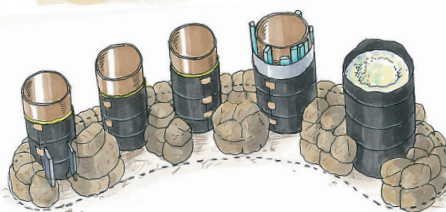


◎ 土積み上げ (7月4日・5日)

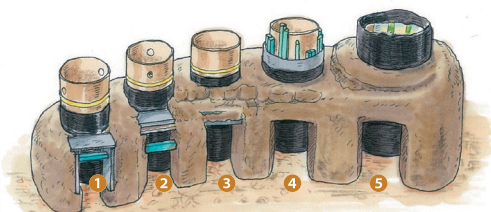
今回は小さなかまど再生サポーターにも土積みができるよう、中型を使用。

フネで発酵させた土に約5cmに切った藁スサをさらに混ぜ合わせ、泥団子を作る。発酵が進んだ藁スサ、この日入れた藁スサ、2種類の藁スサで強度を上げる。出来上がりの寸法、中型に合わせ^{きごて}て積み上げ、木鍬で馴染ませ泥団子同士を接合し、形を整える。

大釜の回りは一段高く積み上げる。



出来上がりの寸法に合わせて泥団子を積む



焚き口の作り方

①発泡材で両側面の瓦がずれないように支える
②天面側は瓦2枚で厚みを調整し、両側面の瓦を土で塗り込む
③④天面に柔らかめの団子を積んで表面をなじませる
⑤上塗り前に土台をととのえる

◎ 表面仕上げ (8月8日)

6月の土づくりの際、取り分けていた仕上げ用の土2に対して砂1程度の割合で加える。さらに約2cmに刻んだ藁スサ、水を加えて最終調整。

かまどの表面を水刷毛で濡らして湿らせ、^{かなごて}金鍬で仕上げ土を表面に塗る。

掛け口に^{かまつば}釜づばを水平になるように置き、周囲を調整。

後日、解体時に一旦取り除いた灰出し部分の石を配置した。





多くの人の手で再生された2代目ヘツツイ

最後のワークショップから2ヶ月かけてヘツツイを乾燥、養生させました。

2代目のヘツツイは、栗東市内・外からヘツツイ再生に参加した延べ205人のかまど再生サポーターと、それ以外に最初の土づくりから毎回のワークショップの補助などを担った実行委員会のメンバーなど、多くの方の手で作り上げたものとなりました。

今後はこのヘツツイを、栗東におけるヘツツイ作りの知恵や工夫のみならず、地域の暮らしぶりなどを伝える貴重な資料としていきたいと考えています。また、この事業に携わってくださった、多くの方々の思いを受け止め、ヘツツイを中心として旧中島家住宅をより動的に、“活用する博物館資料”として利用していくことが、この事業を本当の意味で完成させることになると考えています。

旧中島家住宅ヘツツイ(かまど)再生事業

—ヘツツイ再生ものがたり—

発行日	平成27年10月12日
編集・発行	市民とともに行う栗東歴史民俗博物館創造活動事業実行委員会
作図・デザイン	中川未子(よろずでざいん)
文	大西稔子(栗東歴史民俗博物館 学芸員)
事務局	栗東歴史民俗博物館 〒520-3016 滋賀県栗東市小野223-8 TEL.077-554-2733 / FAX.077-554-2755

*表紙の写真は平成5年度に復元された初代ヘツツイ築造の様子